キズナエピソード

百波瀬 ここあ　3話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//ここあの家・リビング

ここあの弟たちとは、それからもよく一緒に遊んだ。

場所は公園だけとは限らず、

天気の悪い日などはここあの家で遊ぶこともあった。

もうそれは、日課――というよりは日常のようだった。

//ヴィジュアルノベル形式開始

//ADV形式終了

［和哉］

「とびおとびお！

ジャンプキックするから俺のこと持って！」

［達哉］

「俺も俺も！」

［とびお］

ここあの弟たちは、特撮ヒーローのマネがしたいらしく、

今日は何回も抱っこをせがんでくる。

［とびお］

「お前ら、家の中くらい大人しく遊べよ！

あーいうのは編集でやってるんだから、

人力は勘弁してくれ……」

［とびお］

……と言っても、聞き入れてくれるはずもなく。

俺は二人を抱えたまま、家の中をいったり来たり。

へばりかけてきた頃に、ようやくここあがやって来る。

［ここあ］

「はいはーい。みんなおつかれー。

いっぱい騒いで、お腹ぺこりんでしょ～？

夕飯できたよ～」

［和哉＆達哉］

「わーい、ご飯だご飯ー！」

［とびお］

「……もうそんな時間か。

じゃあ、俺はそろそろ帰るよ」

［ここあ］

「にゃはは、何遠慮してんの。

とびおの分も作ったからさ。食べてってよ。

とびお、アレルギーとか好き嫌い、なかったよね？」

［和哉＆達哉］

「そうだよ、とびおも食べてけよー。

お姉ちゃんの料理、美味しいんだぞー」

［とびお］

三方向から説得されては、お言葉に甘えざるをえない。

実のところ、キッチンから漂ってくる香りが

食欲をそそるものだから、気になってはいたのだ。

［とびお］

はいどうぞ。と配膳されたのは、

白米、カレイの煮付け、みそ汁、ほうれんそうのお浸し。

派手さはないものの、どれも家庭的で安心する献立だ。

［とびお］

そして、なによりも美味しかった。

［とびお］

「うまい、うますぎる！」

［ここあ］

「あははー、ありがと。

……ほら和哉、口に入れたまま喋らない。

達哉は箸で遊ばない」

［とびお］

美味しい料理で舌鼓をうちつつ、ここあを眺める。

こんな贅沢ができるなんて、俺は幸せものなのだろうか。

［とびお］

夕食を満足行くまで味わったあとは食休みもかねて

ソファでまったりとさせてもらうことになった

［とびお］

そんな時、ふと周りが静かなことに気が付いた。

不思議に思って見回していると、

後片付けを終えたここあがやってくる。

［ここあ］

「あぁ、弟たちなら寝ちゃったよ。

とびおっちがいっぱい遊んでくれたうえに

満腹になったからね～」

［とびお］

「俺を振り回すだけ振り回しといて、

自分たちは体力が切れたらすぐ寝るとは……」

［ここあ］

「にゃはは、ホントだよね。

でも、ほら見てみなよ。このあどけない寝顔。

こーいうの見てると、なんか幸せにならない？」

［とびお］

ここあに言われて、俺は二人の寝顔を見た。

たしかに、幸せそうにぐっすりと寝ている。

［ここあ］

「……だから今、この家は実質

ここあととびおっち、二人きりなんだよ」

［とびお］

え！　ホントだ！　たしかに！

［ここあ］

「ぷくく。なに緊張してんのさ」

［とびお］

俺の心中はすぐにばれた。

ここあはにやにや笑うと、俺の腕に抱き着いてくる。

［ここあ］

「弟たちだけじゃなくて、ここあのことも構えよー」

［とびお］

「いや、ちょっと、からかうなよ。

なんか恥ずかしいだろ」

［ここあ］

「えー？　そうー？」

［とびお］

「そうだよ。

……ここあだってやってて恥ずかしいだろ？」

［ここあ］

「はぁ……。私が恥ずかしいかどうかねぇ。

それぐらい言わなくてもわかんなくちゃ」

［とびお］

ここあはいたずらっぽく笑うと、

俺の腕を引いて顔を近づけた。

［とびお］

そして、キスされた。

［ここあ］

「……んっ。

どう？　私の気持ち、わかった？」

［とびお］

「あ、あぁ……」

［とびお］

小悪魔みたいに笑うここあを前にして、

俺はしばらく思考が働かなかった。

//【R18版の場合、ここに挿入】

［和哉＆達哉］

「なにしてるの？　とびおとお姉ちゃん」

［とびお］

「ほぇ!?」

［とびお］

思わず変な声が飛び出た。

いつの間にか、起きてきてしまっていた。

［とびお］

とは言え、どうも寝ぼけているらしい。

目をこすりながら、ぼーっとしている。

［ここあ］

「あはは。どうしたの、怖い夢でも見た？」

［とびお］

ここあはさり気なく髪の乱れを整えながら、

弟に笑いかけていた。

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

「ねぇ、とびおは今日、お泊りしていくのー？」

そう尋ねてくる弟たちの目は、期待でキラキラと輝いていた。

そう言えばもう時間も遅い。

俺は挨拶をしてすぐに変えることにした。

と言うか、あんなことをした後だから

あの場に残るのは少々気まずかった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//3話END